

アオリイカ柴漬試験

瀬底正武・中村勇次

1. 要約

- 1) アオリイカ産卵場の造成等有効な方策を検討するため同試験を実施した。
- 2) 天然柴、人工柴とも産卵を確認するまでには至らなかった。
- 3) アンジェラロ周辺のサンゴ礁域での産卵も確認されなかった。
- 4) 産卵はサンゴ礁が発達している海域とそうでない海域との違いが考えられる。
- 5) 産卵行動は周辺海域の産卵条件によって大きく左右されることがシーズンを通して、若干の知見を得ることが出来た。さらに、造成に当たっての環境条件（周辺一帯の汚れの状態、サンゴ礁の発達状況等）が柴漬事業を展開する上での大きな課題である。

2. 目的

アオリイカはその一生涯を湾内および湾外のごく沿岸水域で生活している。寿命が1～2年であり、産卵もほぼ周年みられ、その成長もきわめて速く、また市場価値も高いため栽培漁業の対象種として適種と思われる。さらに、漁業者に対し栽培漁業の重要性とイノーの効率的な活用について実践を通して産卵場の造成等有効な方策を検討するために同試験を実施した。

3. 材料及び方法

- 1) 試験実施に当たっての協力者
 - ①渡名喜村漁業協同組合
 - ②イカ類増養殖研究会（仮称）
会長 比嘉栄喜氏（他会員7名）
- 2) 実施時期及び実施場所
 - ①実施時期：平成14年8月～平成15年3月

②実施場所：渡名喜島東海域（礁池内、
図-1）

4. 試験方法

天然でのアオリイカの産卵はホンダワラ、スガモ等の藻類、サンゴ、その他海中投入物の古網等が産卵基質となっている。これまで、試験的に実施した柴漬産卵場での産卵も効果的であり、柴漬産卵場の設置は親イカの保護産卵場造成の立場から有効な方策と思われる。今回実施した柴の設置方法は、図-4に示したように延縄式の垂下方法で実施した。柴として使用した基質は、ススキ、竹、人工柴を1連につき28柴の5連垂下した。設置場所は、図-2に示したように礁池内の通称「アンジェラロ」水深7m～8mに前後して2連設置した。また、設置後の管理についてはイカ類増殖研究会が班を作り週1回毎に柴に付着した汚れの除去やススキは傷みが早いいためその都度比較的長期間使用可能な竹柴に切り替える作業を行う等産卵環境作りに配慮した。さらに、管理状況を把握するため、表-1に示したようにアオリイカ産卵日誌をつけるよう努めた。

5. 試験経過及び結果

柴漬試験の連作り作業は、8月12日から14日にかけて渡名喜村漁協荷捌施設内と周辺広場で実施された。連の製作には研究会のメンバー以外に漁協青壮年部や漁協理事の協力により順調に作業が進められ13日の午後には設置を完了した。同日の夕方、研究会のメンバーと青壮年部等17名が参加されアオリイカ柴漬試験及び孵化蓄養（図-3）後の放流について説明会と意見交換会を行った。設置後の調査については漁

協を通して逐次報告するようにした。また、人工柴はメーカー製品の金欄の他に途中からカスタニ式のイカ産卵床（写真参照）6基設置した。その結果、設置後の産卵状況については平成15年4月末現在天然柴人工柴とも産卵の確認はされなかった。

1) 渡名喜島の漁獲時期

漁獲は、毎年10月から翌年の3月までがアオリイカの漁獲時期である。今年から資源管理の意識を高めるために、10月解禁日を2カ月遅らせ12月に設定したが一部の組合員の不徹底により、結局従来通りのシーズンとなった。その背景には、10月から12月にかけては魚体が小さく（外套長10cm15cm前後と小さく、産卵魚体は20cm以上）商品価値も低く、さらには産卵にも影響を及ぼすことから漁協としては資源管理の観点から協議の上組合員への周知徹底を図ったが聞き入れてくれなかった。ちなみに、同島での1日当たり平均漁獲量は100尾/1日（1,500円/kg）程度の漁獲が見込まれている。今年较去年に比べ漁獲は若干良く、天気の良い日ほど良く釣れるようだ。漁獲形態は10月ごろは、島の南側から釣れ始め12月からは北側に移動し3月には終期を向かえる。4月に入ってから全く釣れなくなる。

2) 天然の産卵状況

一昨年までは、アンジェラロの生きたサンゴ礁（死んだサンゴ礁には産まない）に産み付けられたのをよく見かけたようだが昨年から見られなくなったと聞く。その原因については、ここで言及する程の調査資料等持ち合わせがないので控えることにするが、昭和48年度の大宜味村塩屋湾で行った柴漬試験と今回の試験を比較検討してみると次のようなことが

考えられる。

- ①塩屋湾の湾内にはサンゴは、ほとんど生息してなく湾口から入ってきた親イカは天然の産卵基質（サンゴ等）が形成されてないため、結局人工的に設置した柴等に産みつけるのではないかとと思われる。
- ②一方、天然のサンゴ礁が発達しているイノー等は天然産卵床が多く形成されているため人工柴よりも産卵条件が優れているからではないかと思慮される。
- ③その他に、土地改良等による赤土汚染がサンゴの斃死を招き産卵阻害の要因になっているのではないかとと思われる。

6. 参考文献

- 1) 琉球水研報：アオリイカの養殖試験1967。
- 2) 水産試験場：栽培漁業漁場資源生態調査報告1972。
- 3) 瀬底正武：アオリイカの稚子の孵化飼育について（水改普及室1974）

渡名喜島

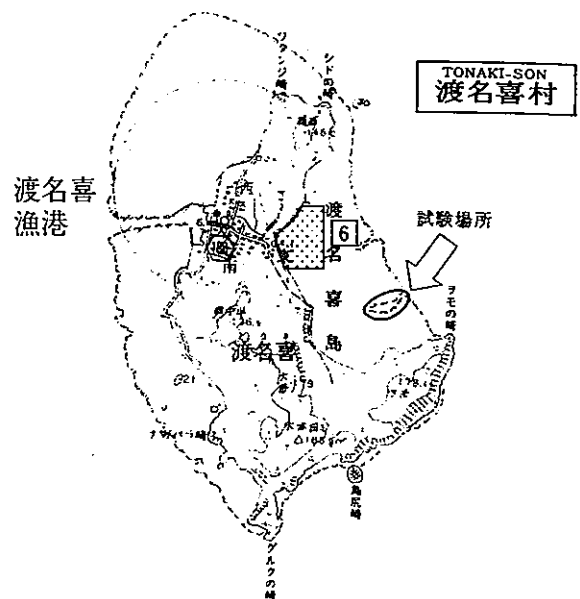
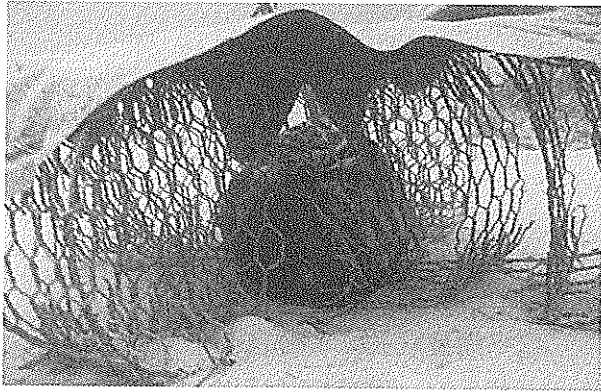


図-1：試験場所

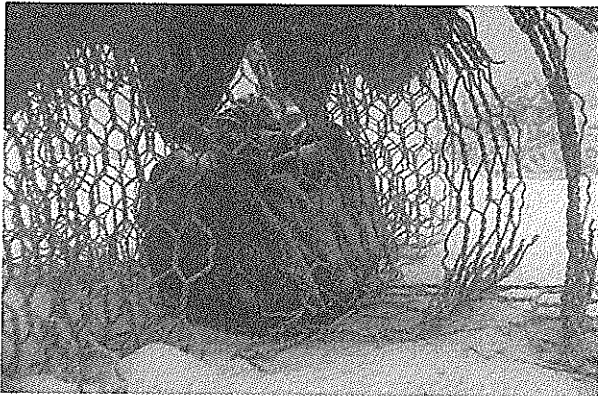
①カスタニ式イカ産卵床



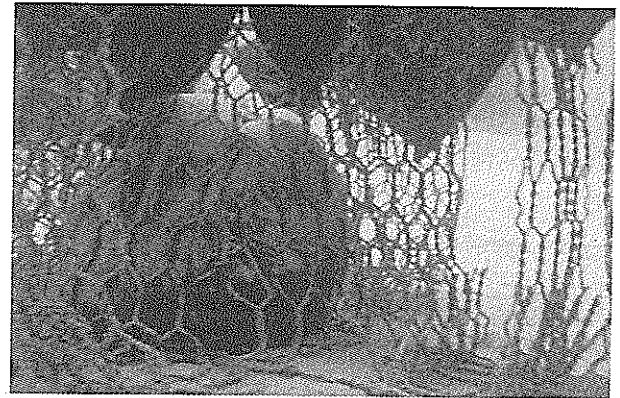
①-1



①-3

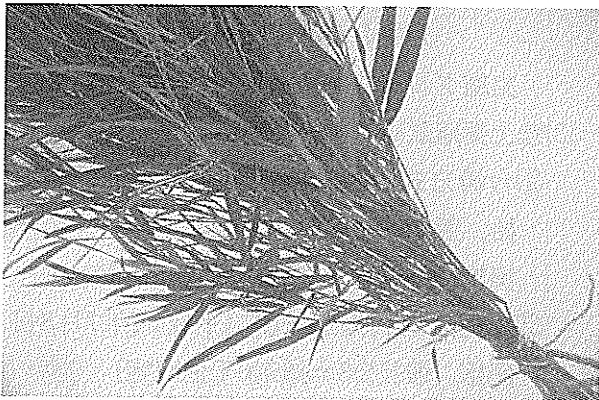


①-2

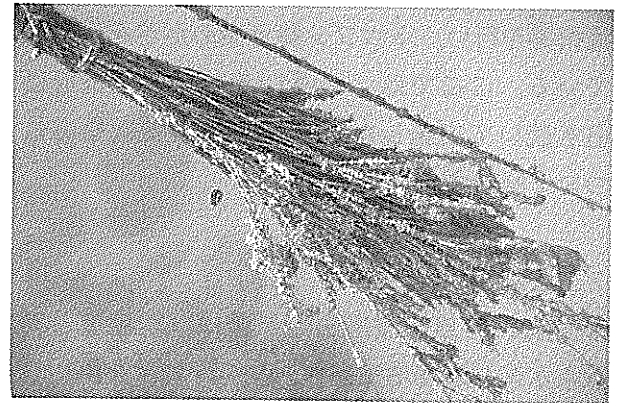


①-4

②ススキ・竹柴産卵床



②-1



②-3



②-2



②-4